（翻訳）朝鮮半島南部地域における青銅器時代の火葬墓に対する考察

金　　権　九[*1]
訳：平　郡　達　哉[*2]

Consideration of Bronze Age cremation tombs in the southern part of the Korean Peninsula

KIM Gwong-gu
(Translation: HIRAGORI Tatsuya)

キーワード：朝鮮半島南部地域、青銅器時代、火葬墓、遼東半島、儀礼

はじめに

朝鮮半島を含む東北アジア地域では、青銅器時代の火葬墓とされる遺構が多数確認され研究も進められている（李隆助ほか 1988、河　文　植 1997；1998a；1998b；2005；2009、卜箕大 2005、チェ・ホヒョン 2014、呉大洋ほか 2015、申石鷄 2015、金権九 2017）。火葬墓と考えられる墳墓遺構が次第に増加しつつある状況にあり、これに対する検討が必要となっている。

火葬とは火を使用して遺体を燃やす葬法、火葬墓とはそのような火葬を用いた墓制であると定義できる。火葬を埋葬主体部内部で行う場合、あるいは別の場所で火葬した後、選骨して持ち帰り墓に埋める場合がありうる。そして、火葬墓の埋葬主体部で直接火葬に付したものを原地火葬墓に、火葬地点と埋葬地点が異なるものを揀骨火葬墓に分類されてい

図１　朝鮮半島南部地域青銅器時代
火葬墓関連遺跡分布図

1. 旌善 梅屯洞窟　2. 広州 駅洞 石棺墓　3. 春川 中島　4. 慶州 錫杖洞 876-5 番地　5. 慶州 道溪里支石墓群Ⅱ　6. 慶州 徳泉里　7. 慶州 典村里　祭壇遺構　8. 大邱 新西洞Ⅱ　9. 大邱 上洞支石墓 第１号 10. 保寧 平羅里 11. 平澤 土津里　12. 安城 萬井里シンギ ３・４号石棺墓　13. 羅州 郎洞 １号支石墓

＊１ 韓国　啓明大学校史学科
＊２ 島根大学法文学部社会文化学科

る（呉大洋ほか 2015：93）。

本稿では従来、火葬墓に分類・研究されてきた朝鮮半島の主要墳墓を取り上げ、埋葬主体部の規模、埋葬主体部の位置（地下式・半地下式、地上式）、灰層と炭の残存有無、被熱痕跡の度合い、人骨の残存様相（伸展葬かどうか）、遺体火葬場所の把握有無などを整理する。その後、青銅器時代全期間における火葬墓の存在有無、朝鮮半島南部地域における火葬墓存在の可否、支石墓群内における火葬墓の比率、火葬墓の類型、火葬墓以外の儀礼の可能性についても検討してみよう。

1．主要関連遺跡の検討（図 1）

（1）旌善　梅屯洞窟

江原道旌善郡南面楽同里に位置する旌善梅屯洞窟では新石器時代文化層の上から青銅器時代の灰黒色灰層が確認された。青銅器時代

写真１　旌善 梅屯洞窟全景（延世大博 2019）

写真２　旌善 梅屯洞窟出土人骨の分布様相（延世大博 2019）

灰層の厚さは約 11cm ～ 38cm を測り、焼け残った灰成分と炭片そして３個体の人骨片が検出された。青銅器時代文化層に該当する４層出土遺物としては、刻目突帯文土器口縁部片、二重口縁土器片、赤色磨研土器、三角湾入無茎式石鏃がある（延世大学校博物館 2019：27-34・63-70）（図 2-1・2）。

旌善梅屯洞窟は青銅器時代早期の洞窟墓であり、定着農耕社会の記念物である支石墓が築造される以前の墳墓遺跡として注目される（写真 1・2）。本溪地域の馬城子洞窟遺跡と張家堡洞窟遺跡など青銅器時代早期まで遡る洞窟火葬墓との関連性が注目される。

（2）広州　駅洞遺跡石棺墓

京畿道広州市駅洞遺跡の石棺墓は単独で築造されており、墓壙の長さ 1.9m、幅 0.9m、残存深さ 0.25m を測る半地下式埋葬主体部を構築しており、異形銅器、遼寧式銅剣、三角湾入無茎式石鏃、天河石製玉類が出土した（図２－３・4）。石棺墓の一部石材には被熱痕が確認され、なかには高熱によって割れた石材も見られる。内部からは木炭が確認され、銅剣は熱によって脊が弧状に曲がった状態で出土した。人骨は埋葬主体部内部に散らばった状態で検出された（ハノル文化財研究院 2012：80-87・302-308）。

広州駅洞遺跡石棺墓の場合、埋葬主体部の大きさを考慮すると、伸展葬で火葬をした結果、強い熱によって割れたり被熱痕がある石材一部が確認され、銅剣も熱によって曲げられて木炭も確認されるものと推定される。総合的に見ると、原地火葬をしたものに分類できるが、埋葬儀礼の一つとして埋葬主体部を構築し遺体を安置した後、火を使用した儀礼を経た結果と見ることもできる。

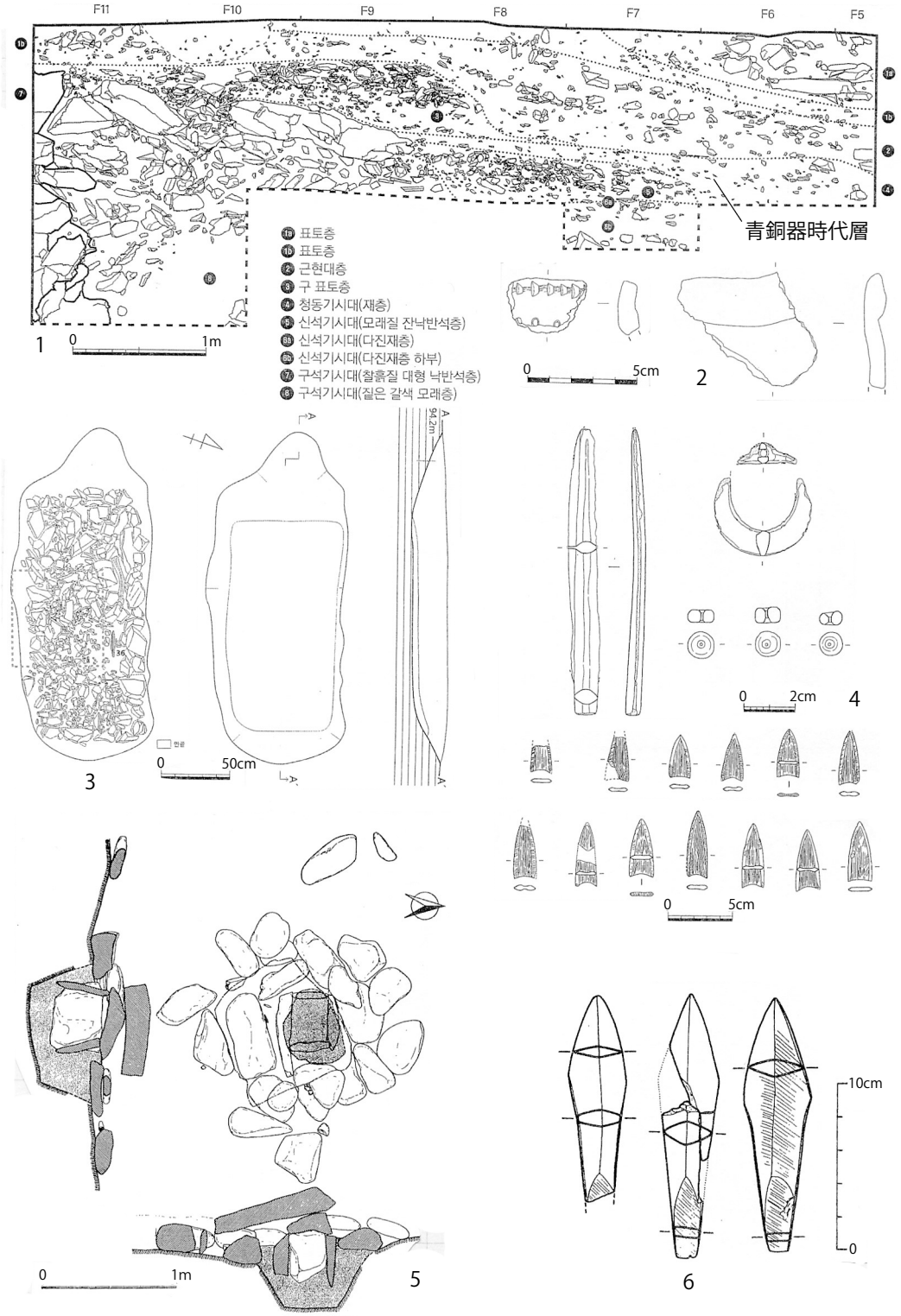

図２　推定火葬墓または火を使用した儀礼遺構①

1. 旌善 梅屯洞窟　2. 旌善 梅屯洞窟出土遺物　3. 広州 駅洞支石墓３号

4. 広州 駅洞支石墓３号出土遺物　5. 春川 中島支石墓１号　6. 春川 中島支石墓１号出土遺物

（3）春川　中島遺跡

国立中央博物館によって調査された江原道春川市の中島Ⅰ号支石墓は埋葬主体部となる石棺の周囲に東西 2.05m、南北 1.9m の敷石が施されている。石棺内側の法量は上部が長さ 0.3m、幅 0.25m 程度、下側に行くほど徐々に開くように斜めに立てられ、石棺下部は長さが約 0.5m になる（図 2-5）。石棺内から相当量の木炭と骨片が内部東側に偏って散乱した状態で検出され、石棺下部では砂土が赤色を呈した状態で炭と骨が多量に出土した。

頭蓋骨など上半身に該当する部分は主に石棺東側に偏っており大腿骨など足の骨が主に西側に散らばっていた点、その他に骨盤と小さな骨が出土した位置からみて頭位を東側にし、横にかがめて埋葬した側臥屈葬をなすものと推定される。土壙内で確認された土が赤く焼けた痕跡を見せ、骨が大部分細かく砕けており、残存している骨には所々割れてひびが入った痕跡があることから、遺体が土壙内で直接火葬された原地火葬であると考えられる。つまり、埋葬地で土壙を掘って遺体をその場で火葬した後、その上に石棺を構築したものと発掘担当者は考えた。石棺墓周辺の敷石の間から長菱形石鏃 3 点（図 2-6）と無文土器直立口縁片が出土した（国立中央博物館 1983：4-7）。

（4）慶州　錫杖洞 876-5 番地遺跡

慶尚北道慶州市錫杖洞 876-5 番地遺跡では石棺墓 3 基と火葬墓 1 基が確認された。墓域式支石墓の墓域内で石棺墓 1 基と火葬墓が調査された（図 3-1）。墓域式支石墓の墓域で確認された石棺墓 1 の内部は長さ 0.82m、幅 0.27m を測る。半地下式または地下式の石棺墓 1 の北側充填石の下から一段柄式石剣 1 点と石鑿 1 点が出土した。小形石棺であり内部からの出土遺物は無かった。

石棺墓 1 から西側に約 2.4m 離れたところで平面形態が方形を呈する火葬墓が調査された。火葬墓は長さ 2.16m、残存幅約 1.75m を測り、深さ約 0.1m の地点で木炭が確認され、その木炭の上面から 3 個体分の人骨が検出され、すべて伸展葬をなすものとみられる。火葬墓で調査された木炭下部からはこれといった施設が確認されておらず、床面は高温によって焼結されて若干赤褐色を呈しており、遺物は出土していない。調査区域の西側境界線で調査された石築形石棺墓と石棺墓 2 では火葬の痕跡が確認されていない。墓域内の火葬墓の全面で人為的に敷かれた木炭が確認され、木炭上部から人骨片が検出されており、火葬および儀礼関連遺構として墓域内に火葬墓が設置された前例がないものである（鶏林文化財研究院 2012：181-197 ）。

（5）慶州道溪里支石墓群Ⅱ

慶尚北道慶州市西面道溪里支石墓群はⅠ区域で計 50 基の墓域式支石墓の埋葬主体部が調査された（三韓文化財研究院 2018：8）。Ⅰ区域で調査された 6 基の支石墓遺構のうち床面が焼結した土壙形態の埋葬主体部を有し、床面から骨が検出された遺構はⅠ区域 1-1 号（埋葬主体部の規模:長さ 1m、幅 0.64 m、残存深さ 0.03m）とⅠ区域 2 号（埋葬主体部の規模：長さ 1.58m、幅 1.1m、残存深さ 0.14m）である（図 3-2）。

慶州道溪里支石墓群Ⅱ区域で調査された 44 基の墓域支石墓埋葬主体部のうち、床面が焼結し骨が検出された遺構としてはⅡ区域 5-3 号、7 号、10-1 号、10-2 号、12-1 号、12-2 号があり、床面のみ焼結したものは

写真３　慶州 道溪里支石墓群Ⅱ区域全景
（三韓文化財研究院 2020）

写真４　慶州 道溪里墓域支石墓７号全景
（三韓文化財研究院 2020）

13-2 号と 13-3 号である。無文土器底部、赤色磨研土器口縁部が出土しており、Ⅱ区域７号遺構は一段柄式石剣が出土していることから編年上の参考となる。Ⅱ区域で調査された上記の遺構はすべて土壙形の埋葬主体部を有しており、埋葬主体部の規模はおおよそ長さが 0.8m ～ 1.8m、幅が 0.6m ～ 1.2m を測り（三韓文化財研究院 2018：1617）、伸展葬はもちろん揀骨火葬も可能な規模になる。Ⅰ・Ⅱ区域で床面焼結痕跡が確認された遺構は 10 基、焼結痕跡と人骨片が検出された遺構は８基を数える。計 50 基の墓域式支石墓埋葬主体部のうち焼結痕跡は 20％の 10 基で確認され、人骨片は 16％の８基から検出された。

（6）慶州　徳泉里遺跡

慶尚北道慶州市内南面徳泉里１号石棺墓は単独で１基のみ調査された。１号石棺墓は残存長 0.8m、残存幅 0.4m を測る。石棺床石の上から赤色磨研土器片１点、無茎式石鏃２点、一段茎式石鏃１点、磨製石剣鋒部片１点が出土した。石棺の壁石と床石には火を受けた痕跡が観察され、床面からは木炭と共に人骨の痕跡も確認されており、発掘担当者は石棺内で遺体を火葬したものと判断した（嶺南文化財研究院 2008; 209-211）（図 4-1）。

石棺は墓壙掘削後、その内部に構築された点を考慮すると半地下式または地下式と判断される。幼児の原地火葬は可能であろうが、脱肉する程度の火葬は難しいと見られる。揀骨火葬や二次葬の埋葬儀礼の一つとして石棺内部で火を使用した可能性がある。

（7）慶州　典村里遺跡祭壇遺構

慶尚北道慶州市甘浦邑典村里遺跡の祭壇遺構 2-1 号南西隅内に位置する区画石列内部で火葬墓１基が報告された。区画墓と類似するものの埋葬遺構は確認されておらず、上石がない点や破砕された遺物と火葬墓の存在から祭壇遺構である可能性が高い（慶尚北道文化財研究院 2015; 77）。祭壇遺構（図 3-3）は敷石がぎっしり敷かれた墓域式支石墓の墓域のような印象を与える。慶州典村里遺跡の祭壇遺構 2-1 号の規模は残存長 32m、幅 9m、残存高 1m を測る。祭壇では４～５段の石段が確認された。南西側丘陵末端部に接する地点で平面方形の小区画石列が確認され、その規模は長さ 5.2m、幅 5.2m を測り、この区画石列内部から火葬墓１基が検出された。火葬墓の平面形態は隅丸方形である（図 3-4）。木炭と骨痕の検出状況から木を置

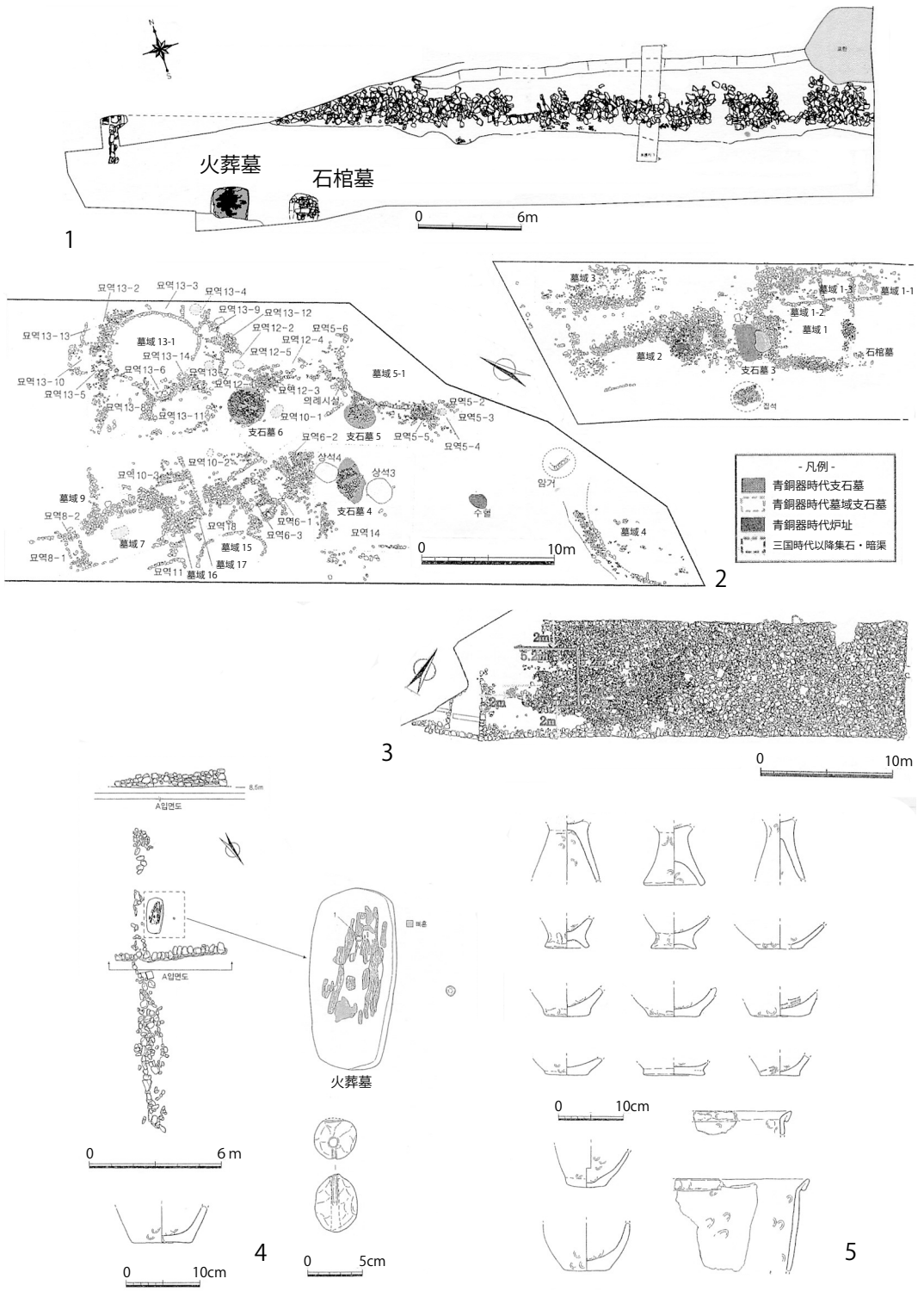

図３　推定火葬墓または火を使用した儀礼遺構②

1. 慶州 錫杖洞 876-5 番地　2. 慶州 道溪里支石墓群Ⅱ　3. 慶州 典村里祭壇遺構
4. 慶州 典村里祭壇遺構下部火葬墓および出土遺物　5. 慶州 典村里祭壇遺構出土遺物

いてその間に葦類を全面に敷いた後、遺体（あるいは動物）と遺物を安置した後、火葬したものと発掘者は推定している。墓壙の長さ 1.55m、幅 0.75 m、残存深さ 0.07m、大型の木炭は長さ 1.03m、幅 0.3 ～ 0.5m を測る。火葬完了後、上部に小形割石を厚さ約 0.1m 敷いて楕円形に近い割石 1 枚で覆って仕上げた。割石の規模は長さ 0.75 m、幅 0.46 ～ 0.55 m、厚さ 0.09 ～ 0.13m 程度である。木炭から 10cm ほど浮いた状態で漁網錘 1 点と墓壙から西に 45cm 離れたところで無文土器甕底部 1 点が出土した。祭壇遺構からの出土遺物としては豆形土器の台脚、無文土器甕底部、断面三角形粘土帯土器口縁部片、把手片があり（図 3-5）、少量の木炭と共に少量の骨痕が検出されたが、人骨なのか祭物を火葬した動物骨痕なのかは不明である（慶尚北道文化財研究院 2015; 39-51,72-75,77）。

祭壇遺構の下部で火葬墓が確認された状況であり、墓壙の規模、木炭の残存長等を総合的に考慮すると、遺体を伸展葬で原地火葬した遺構である可能性が高い。初期鉄器時代の原地火葬墓として注目を集めた。

（8）大邱新西洞遺跡 II 遺跡

大邱広域市東区新西洞遺跡 II 遺跡の B-5 区域 1 号支石墓、4 号石棺墓、5 号石棺墓、6 号石棺墓（図 4-2）、7 号石棺墓（図 4-3）、8 号石棺墓で被熱痕跡ないし木炭が確認された。

B-5 区域 1 号支石墓の半地下式または地上式の埋葬主体部は、長さ 1.2m、幅 0.65 m、深さ 0.75m を測り、上石の下面と埋葬主体部内部の床面と壁面が全体的に被熱しており攪乱を受けてはいるものの支石墓築造当時に火を用いた儀礼行為が執り行われた可能性が高いと発掘者も推定している（韓国文化財保護財団 2012：210-213）。

B-5 区域 1 号支石墓は埋葬主体部の規模から原地火葬は可能であったと考えられるが、埋葬儀礼の一つとして埋葬主体部を構築し遺体を安置した後、火を用いた儀礼を執り行った結果と見ることもできる。

B-5 区域 4 号石棺墓は半地下式または地上式の石棺を有し、その長さが 0.65 m、幅 0.5m、残存深 0.06m を測り、被葬者が成人の場合、伸展葬は不可能な規模である。墓壙は石棺北西側に既存の竪穴を再度掘って造成されているが、竪穴は長さ 0.88 m、幅 0.62m、深さ 0.1m 程度で平面形態が円形を呈し、竪穴内部には木炭が多量に混入した黒褐色砂質粘土と白色の微細な粒が堆積しており、床面は赤く被熱された状態であった（韓国文化財保護財団 2012：217-219）。幼児であれば原地火葬が可能であろうが、成人の場合、揀骨火葬や二次葬が可能な規模の石棺墓であり、被熱痕は埋葬儀礼の一つとして石棺隣接竪穴で火を用いた儀礼が執り行われた結果と見ることもできる。

B-5 区域 5 号石棺墓は半地下式または地上式の石棺の長さが 0.5 m、幅 0.28m、残存深さ 0.08m 程度を測る。墓壙は石棺南東側に既に造成されていた不定形竪穴を再度掘って造成されている。竪穴は長さ 0.8 m、幅 0.75 m、残存深さ 0.07m を測り、その内部には木炭が多量に混入した黒褐色砂質粘土と白色の微細な粒が堆積しており、床面は赤く被熱した状態である。石棺床面に灰黄褐色砂質粘土、木炭が多量混入した黒褐色砂質粘土を 4-5cm 程度整地した状態である（韓国文化財保護財団 2012：218-219）。石棺の規模は幼児を埋葬するにも小さく揀骨火葬や二次葬が可能な大きさである。被熱痕跡は埋葬儀

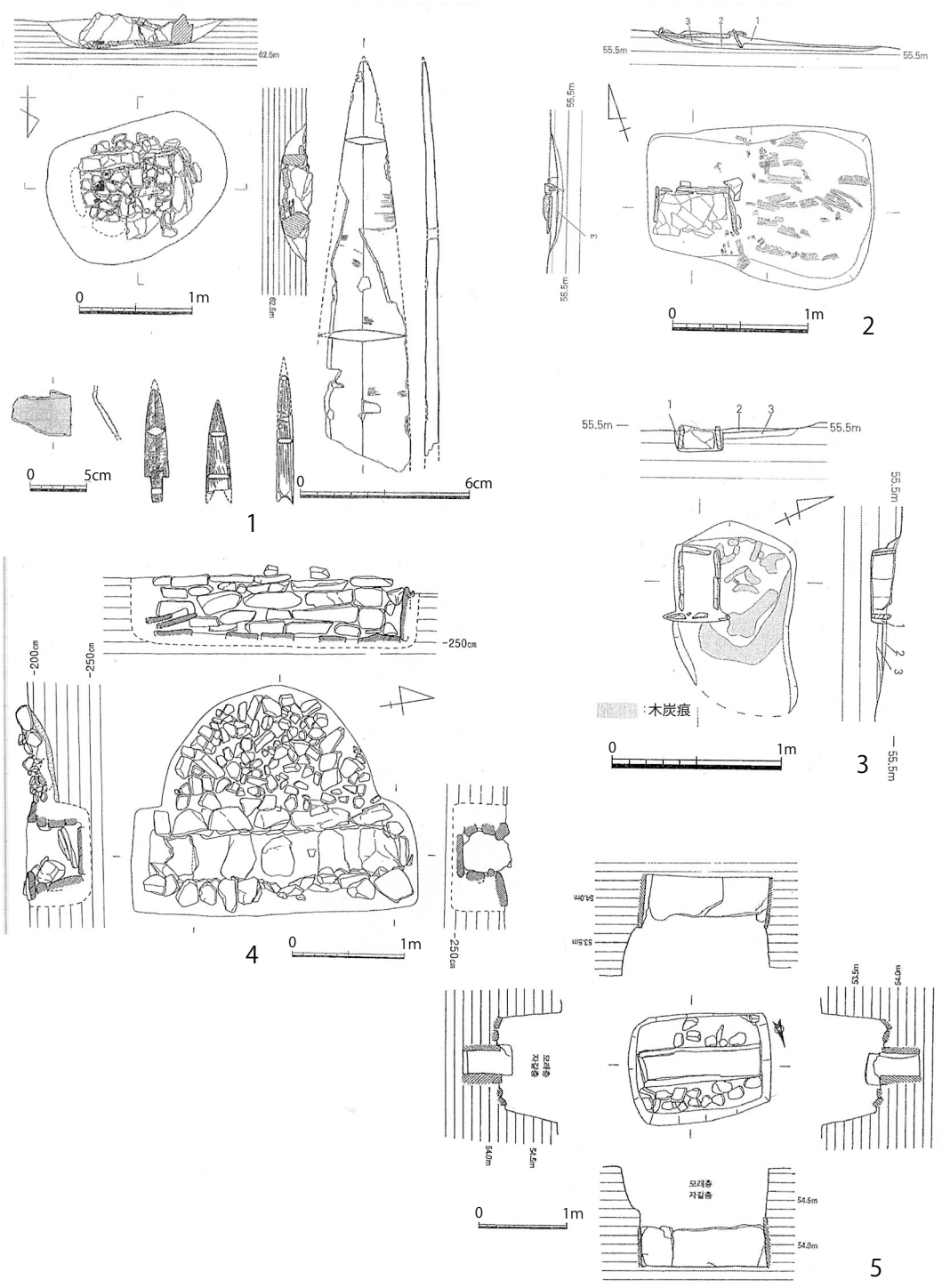

図３　推定火葬墓または火を使用した儀礼遺構③

1. 慶州 徳泉里　2. 大邱 新西洞Ⅱ B-5 区域６号石棺墓　3. 大邱 新西洞Ⅱ B-5 区域７号石棺墓
4. 大邱 上洞支石墓 第１号　5. 保寧 平羅里 3-6 号石棺墓

礼の一つとして揀骨火葬や二次葬において竪穴で火を使用した可能性を示す。

B-5 区域 6 号石棺墓（図 4-2）の残存規模は長さ 0.53 m、幅 0.27m、深さ 0.04m で地上式に近い。石棺は竪穴の北西側にあり、竪穴は長さ 1.67m、幅 1.18 m、残存深さ 0.07m を測り平面形態は不定形である。竪穴の底面は厚さ 2cm 程度に焼結しており、火を用いた儀礼的行為が執り行われたと発掘者は見ている（韓国文化財保護財団 2012：218-221）。石棺の規模から揀骨火葬や二次葬が可能であり、このような過程での辟邪や浄化を目的とした儀礼行為と関連する被熱痕跡である可能性がある。

B-5 区域 7 号石棺墓（図 4-3）の石棺残存規模は長さ 0.34m、幅 0.2 m、深さ 0.13m を測り、半地下式と見られる。墓壙は長さ 0.45m、幅 0.28 ～ 04m、残存深さ 0.15m を測る。墓壙は石棺北東側にある不定形竪穴を再度掘って造成されており、竪穴は長さ 1.12m、幅 0.7m、残存深さ 0.0.5m である。その内部には木炭が多量に混入した黒褐色砂質粘土と白色の微細な粒が少量堆積し、床面は全体的に被熱された状態である（韓国文化財保護財団 2012：221-222）。石棺の規模から揀骨火葬や二次葬が可能であり、これらの過程での闢邪や浄化を目的とした儀礼行為による被熱痕跡の可能性がある。

B-5 区域 8 号石棺墓の石棺は長さ 1.35m、幅 0.45 ～ 0.95m、深さ 0.18m を測り、石棺の壁石と床面が全体的に熱によって焼結された状態である（韓国文化財保護財団 2012：222-223）。石棺は地上式に近い。石棺の規模から原地火葬は可能であるといえるが、肉脱する程度の火葬は難しいと推定される。埋葬儀礼の一つとして石棺を作り遺体を安置した後、火を用いた儀礼を執り行った結果と見ることもできる。

（9）大邱上洞支石墓第 1 号

大邱上洞支石墓群では 38 基の埋葬主体部が確認され、225㎡の調査範囲内で計 40 余基の石棺等埋葬主体部が非常に高い密集度を見せている（国立大邱博物館 2000：110、115）。このうち 1 号埋葬主体部（図 4-4）は長さ 2.06 ～ 2.1 m、幅 0.4 ～ 0.42m を測る。埋葬主体部西長壁の外壁面に接して半円形の積石施設が確認されたが、その長さは約 1.95m で長壁の長さと類似している。深さは 0.24m を測り、充填された石と西長壁面が接しており、竪穴の床面は緩慢に傾斜しており長壁に近づくほど深くなる。この施設は西長壁築造後、竪穴を掘ってその中で火をつけた後、砂利石を利用してその竪穴を覆ったものと推定される。それは砂利石の大部分が赤褐色であり、熱を受けて亀裂が生じたり割れたものが多いためである。竪穴の床面には炭層が 5cm ほど敷かれ、その上を砂利が一定の厚さに覆った状態であるが、西長壁石の一部は熱を受け亀裂が生じたものもある。このような様相からみて支石墓築造時に特別な儀式を行ったものと推定されている（国立大邱博物館 2000：13-16 ）。

大邱上洞遺跡の支石墓埋葬主体部 38 基のうち、火を使用した葬礼儀礼または支石墓築造儀礼の事例は 1 号支石墓でのみ確認された。これは同じ墓域を使用する同時期の支石墓築造集団内でも葬礼儀礼が異なっていたことを暗示する。

（10）保寧　平羅里先史遺跡

保寧平羅里先史遺跡は、支石墓 3 基、石棺墓 14 基、石槨墓 4 基、計 21 基の埋葬主体部が確認された。10 基の石棺墓では炭が少

量確認された（石棺墓 2-2 号、2-3 号、2-4 号、2-6 号、2-7 号、2-8 号、2-9 号、3-2 号、3-3 号、3-7 号）。また、これらとは別の石棺の床面と蓋石に煤が多く付着あるいは煤の痕跡と被熱痕跡が確認されている（3-4 号、3-5 号、3-6 号）（忠北大学校 1996：63-96）。これら石棺墓の大部分は密集した列状分布の様相を見せている。

石棺墓は大部分が地下式であるが二段土壙も確認されている。その規模は一部で例外はあるが、概ね長さ 1 ～ 1.56m、幅 0.3m ～ 0.83m の間に収まる。調査者は 3-4 号石棺墓（長さ 1.34 m、幅 0.38 ～ 0.45m、深さ 0.4m）、3-5 号石棺墓（長さ 1.41m、幅 0.38 ～ 0.45m、深さ 0.4m）、3-6 号石棺墓（長さ 1.37m、幅 0.25 ～ 0.3m、深さ 0.5m）（図 4-5）では床面と四壁そして蓋石とその周辺から火を受けた痕跡が見られ、これらは 3-2 号石棺墓（0.72m、幅 0.22 ～ 0.28m、深さ 0.43m）よりもはるかに規模が大きいため、火葬墓よりは幼児墓と考えている（忠北大学校博物館 1996：85）。

伸展葬が可能な石棺墓の規模ではあるが、火葬よりは埋葬儀礼の結果として炭を残したか煤の痕跡と被熱痕跡が見られると考えるのが合理的である。また、ここの石棺墓のような地下式埋葬主体部で肉脱できる火葬を行うことは難しく、火葬したとすれば他の場所で火葬して人骨を選別する揀骨火葬と結合した埋葬儀礼として火を使用した可能性はある。築造時期は出土した三角形石刀、有茎式石鏃などを考慮すると、青銅器時代後期の松菊里段階と推定される。

（11）平澤　土津里 1 号石棺墓

平澤土津里 1 号石棺墓（図 5-1）は長さ 0.85m、幅 0.82m を測り、墓壙の平面形態が円形をなす。石棺自体は長さ 0.45m、幅 0.19m の小形である。石棺内部と焼土層内から人骨が出土した。骨片の表面に亀裂が確認されたことから火葬骨と判明した。骨の表面は白色の石灰質を呈しており、露天で火葬されたものと推定される。

火葬骨は石棺墓に隣接する北側でも確認された。石棺墓内部と焼土層で確認された人骨が同一人物のものであれば、露天で火葬した後、人骨と炭を焼土層にまず移し、再度骨のみ選別して石棺墓内部に埋葬したものと調査者は考えている。石棺墓西壁の北側と南側から有茎式石鏃と有節柄式石剣が 1 点ずつ出土した（畿甸文化財研究院 2006：195-196）。

（12）安城　萬井里シンギ遺跡 3 号・4 号石棺墓

安城萬井里 3 号石棺墓（図 5-2）は長さ 0.83m、幅 0.58m、残存深さ 0.4m、墓壙は長さ 1.08m、幅 0.68 m、残存深さ 0.26m を測る。石棺内部全体から炭と人骨片が多量に収拾された。調査者は火葬終了後、上石で覆っており、保寧平羅里遺跡石棺墓の蓋石と同一のものと把握した（畿甸文化財研究院 2009：66-68）。図面を見ると埋葬主体部は半地下式と推定される。

安城萬井里 4 号石棺墓（図 5-2）の石棺は長さ 0.56m、幅 0.54m、残存深さ 0.2m、墓壙は長さ 0.74m、幅 0.59m、残存深さ 0.15m を測る。墓壙内部から炭と人骨が大量に収拾され、その上に石棺を設置した。3 号石棺墓とは異なる形態で土壙を掘削して火葬した後、石棺を構築した（畿甸文化財研究院 2009：68-69）。

（13）羅州　郎洞遺跡 1 号支石墓

羅州郎洞遺跡 1 号支石墓（図 5-3）の埋葬主体部の平面形態は長方形を呈し、規模

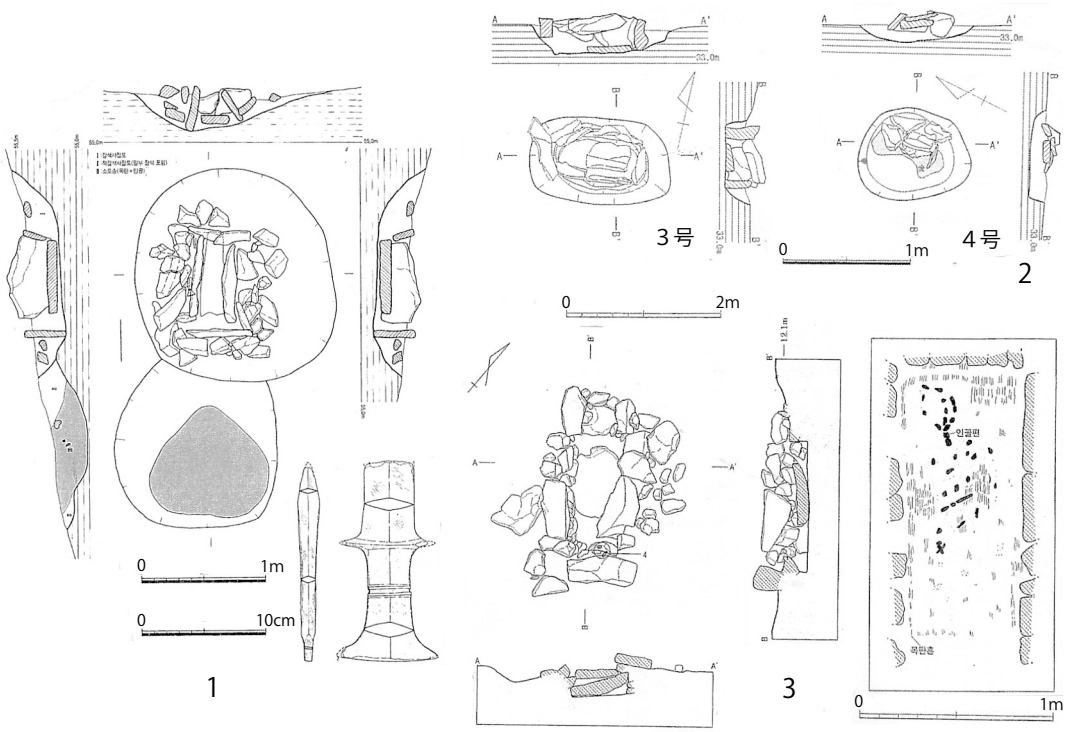

図５　推定火葬墓または火を使用した儀礼遺構④

1. 平澤 土津里遺跡　2. 安城 萬井里シンギ遺跡３号・４号石棺墓　3. 羅州 郎洞遺跡１号支石墓

は長さ 1.54m、幅 0.6 m、深さ 0.52m を測る。埋葬主体部内からは人骨片が多数検出され、人骨の下からは木炭の痕跡が全体的に確認された。木炭の痕跡の範囲は長さ 1.32m、幅 0.56 m、厚さ 0.01 ～ 0.03m である。出土遺物としては有茎式磨製石剣片と無文土器片がある（全南文化財研究院 2006：33 ～ 36）。

下部構造は半地下式と推定され、人骨の分布様相からみて原地火葬の可能性だけでなく、揀骨火葬と火を使用した埋葬儀礼が結合した可能性もある。

２．朝鮮半島の火葬墓に対する検討

（１）朝鮮半島南部地域における火葬墓の編年と分布

ここでは前章で概観した火葬墓関連遺跡の築造時期について調べてみよう。旌善梅屯洞窟火葬墓遺跡は突帯文土器片と二重口縁土器片の出土から青銅器時代早期に、広州駅洞遺跡石棺墓は遼寧式銅剣、無茎式石鏃等の出土から青銅器時代前期に編年されている。また、春川中島Ⅰ号支石墓、慶州錫杖洞 876-5 番地遺跡墓域支石墓の中の火葬墓と石棺墓、慶州道溪里支石墓群Ⅱ、慶州德泉里遺跡１号石棺墓、大邱新西革新都市開発事業敷地 B-5 区域支石墓群、大邱上洞支石墓群第１号支石墓、保寧平羅里先史遺跡、平澤土津里１号石棺墓は磨製石剣、無文土器などの出土遺物を考慮すると、青銅器時代後期に編年される。一方、慶州典村里遺跡祭壇遺構 2-1 号は三角形粘土帯土器口縁部片、把手片等の出土を考慮すると初期鉄器時代に編年される。

本稿で扱う火葬関連の証拠と火葬葬法や埋葬儀礼の痕跡は青銅器時代早・前期だけでな

く、青銅器時代後期の松菊里文化段階でも確認され、初期鉄器時代まで持続した。火葬墓と墓で火を使用する埋葬儀礼の痕跡が確認される朝鮮半島南部地域における空間的範囲は、本稿で便宜上抽出した資料の限界はあるものの、中部地域、湖西地域、嶺南地域など朝鮮半島南部全域にわたるものと見られる（図 1）。

（2）火葬墓・関連遺構の類型分類

朝鮮半島南部地域における火葬墓の類型を埋葬方法の工程、小形埋葬主体部で行われた二次葬の方法、特殊な埋葬方法の有無等を考慮して 4 類型に分類した研究があり注目される。そこでは、火葬墓研究と関連して埋葬主体部構築後、被葬者を安置して火葬する類型、墓壙を掘削して被葬者を安置して火葬した後、その上に埋葬主体部を構築する類型、通常の埋葬遺構と判断できない遺構に多数の被葬者を安置して火葬する類型、別の場所で被葬者を火葬した後、その骨を選んで埋葬主体部に安置する類型に分けられている（申石鷄 2015：36 ～ 39、75）。しかし、考古学的に火の使用痕跡は確認されるもののそれが火葬墓なのか、あるいはただ火を使用した儀礼の痕跡なのかどうかを区分し難い事例もある。現在までの事例のみで松菊里文化圏の火葬類型と非松菊里文化圏の火葬類型を区分できるのかについて疑問があり、今後、資料がさらに蓄積されるまで結論を留保することが安全であると考える。

したがって、本稿では申石鷄の研究を基本的に受け入れながらも火葬ではない遺構である可能性も考慮しなければならないという立場で「原地火葬」、「揀骨火葬」、「火葬ではない儀礼の可能性」の基準と火葬痕跡が見られる位置を考慮して以下のように類型分類を行った。

類型Ⅰ：原地火葬墓類型（原地火葬の可能性がある類型）
類型Ⅱ：揀骨火葬墓類型（揀骨火葬の埋葬儀礼として火を使用する類型）
類型Ⅲ：火葬墓ではないが、火を使用する葬礼儀礼類型（火葬と関係なく辟邪儀礼、浄化儀礼等として埋葬過程で火を使用する類型）

類型 a：埋葬主体部（石棺、土壙）内で火の使用痕跡（火葬墓含む）が発見される類型
類型 b：埋葬主体部の下や祭壇施設の下で火の使用痕跡（火葬墓含む）が発見される類型
類型 c：祭壇施設や墓域施設内で火の使用痕跡（火葬墓含む）が発見される類型
類型 d：埋葬主体部に隣接する施設で火の使用痕跡が発見される類型

これらの基準に沿って、主要な火葬墓推定事例を火葬墓と火を使用した痕跡がある関連遺構を分類したものが表 1 である。そこで示された類型は青銅器時代における火葬と関連した葬法の多様性を見せ、支石墓墓制と火葬の葬制が結合して地域別に、そして支石墓群別に共通性と多様性を共に示す様相を見せる。そして、火葬墓ではないものの火を使用する埋葬儀礼も確認されており（Ⅲ類型）、火葬墓と把握する際には慎重を期する必要がある。

（3）火葬墓の起源と展開

本溪地域の馬城子洞窟遺跡と張家堡洞窟遺跡、大連地域の崗上墓と楼上墓（社会科学院出版社 1966、朴晋昱 1988、文物出版杜 1994）等の蓋石式支石墓群または連接積石墓群で火葬の可能性が確認される。遼東地域

表１　朝鮮半島南部地域青銅器時代火葬墓一覧

遺跡名	埋葬主体部規模	埋葬主体部の地上・地下・半地下式	人骨・木炭・被熱痕の様相	時期（出土遺物）	火葬の可否と種類	火葬墓の類型分類
旌善 梅屯洞窟火葬墓	?	?	人骨３個体、厚い灰層	青銅器時代早期（突帯文土器片、二重口縁土器片）	原地火葬可能性／伸展葬	Ⅰａ
広州 駅洞遺跡石棺墓		半地下式	人骨片、被熱痕	青銅器時代前期（遼寧式銅剣、三角湾入無茎式石鏃）	原地火葬可能性／伸展葬	Ⅰａ
春川 中島遺跡石棺墓１号	小形	地下式	人骨片、被熱痕、木炭	青銅器時代後期（有茎式石鏃）	竪穴で原地火葬をした後、その上に石棺墓を築造した可能性	Ⅰｂ
慶州 錫杖洞8765 番地遺跡墓域支石墓（石棺墓と火葬墓）	小形（石棺）	半地下式／地下式	石棺からは人骨片未確認／火葬墓から人骨３個体分と多量の木炭	青銅器時代後期（一段柄式石剣等）	墓域支石墓の墓域内で火葬をした後、人骨３個体分を石棺に埋葬しなかった可能性／揀骨火葬が全てなされなかった様相である可能性	Ⅰｃ Ⅱｃ
慶州 道溪里支石墓群Ⅱ	伸展葬可能規模	半地下式	焼結痕跡と人骨片	青銅器時代後期（一段柄式石剣等）	蓋石式支石墓群または変形南方式支石墓群／埋葬主体部規模考慮時、伸展葬と揀骨火葬ともに可能／火を使用した埋葬儀礼存在可能性	Ⅰａ Ⅱａ Ⅲａ
慶州 徳泉里遺跡１号石棺墓	小形	半地下式／地下式	被熱痕跡、木炭、人骨片	青銅器時代後期（丹塗磨研土器片、無茎式石鏃、一段茎式石鏃、石剣鋒部片）	揀骨火葬の埋葬儀礼で火使用／二次葬の埋葬儀礼で火使用／幼児原地火葬可能性	Ⅰａ Ⅱａ Ⅲａ
慶州 典村里遺跡祭壇遺構 2-1 号	伸展葬で火葬が可能な規模の竪穴	地下式	少量の木炭と共に少量の骨痕（人骨、動物骨かどうか確認不可）	初期鉄器時代（豆形土器台脚、無文土器甕底部、断面三角形粘土帯土器口縁部片、把手片等）	原地火葬可能性／火葬墓上に祭壇遺構構築	Ⅰｂ
大邱 新西革新都市Ⅱ支石墓群	伸展葬が可能な規模の石棺（6 基の埋葬主体部）	半地下式／地上式	被熱痕跡、木炭片、人骨片等確認	青銅器時代後期	原地火葬可能性／伸展葬または揀骨火葬後、埋葬儀礼で火使用可能性	Ⅰａ Ⅱａ Ⅲａ
大邱 上洞支石墓第１号	埋葬主体部である石棺にくっついている積石施設	地下式	被熱痕跡、黒色土	青銅器時代後期	伸展葬の埋葬儀礼として火の使用	Ⅲｄ
保寧 平羅里先史遺跡	伸展葬が可能な規模の石棺等 13 基	地下式含む	被熱痕跡、木炭	青銅器時代後期（三角形石刀、有茎式石鏃）	揀骨火葬あるいは埋葬儀礼としての火使用可能性	Ⅱａ Ⅲａ
平澤 土津里１号石棺墓	火葬後焼土層に１次　移動後揀骨副葬	地下式	被熱人骨、焼土層	青銅器時代後期	揀骨火葬	Ⅱｄ
安城 萬井里シンギ遺跡３号石棺、４号石棺墓	土壙を掘った後火葬してその上に石棺墓造成	半地下式	墓壙内部から炭と人骨が多量収拾	青銅器時代後期	原地火葬後、揀骨火葬	Ⅰｂ・Ⅱｂか両者混合
羅州 郎洞遺跡１号支石墓	埋葬主体部内に人骨広く分布して人骨下に木炭層確認	半地下式	人骨、木炭痕跡、有茎式磨製石剣片と無文土器片	青銅器時代後期と推定	原地火葬と推定、あるいは揀骨火葬前に火を使用した埋葬儀礼	Ⅰａ・Ⅱａ可能性

の場合、火葬墓が青銅器時代早期の突帯文土器段階でも確認される[(1)]。旌善梅屯洞窟遺跡から出土した突帯文土器片を考慮すると、青銅器時代早期の遼東地域から朝鮮半島に火葬墓の葬制と墓制が入ってきたとみられ、朝鮮半島における火葬墓の起源地は遼東地域、特に本溪地域・旅順半島地域と関連するものと思われる。

そして、崗上墓と桜上墓の事例が示すように蓋石式支石墓群と墓域式支石墓の築造集団が火葬の葬法を採択する様相を見せる。慶州道溪里支石墓群Ⅱの火葬事例は朝鮮半島南部地域で確認される崗上墓・樓上墓的な要素である。そして、慶州錫杖洞 876-5 番地遺跡の墓域支石墓群、保寧平羅里先史遺跡といった青銅器時代後期の墓域支石墓群でも火葬墓が採択され、慶州典村里遺跡のような祭壇施設の下でも火葬墓が確認され初期鉄器時代まで続くものと見られる。

青銅器時代の支石墓群の中でも一部の支石墓でのみ火葬という葬法が使用されている点は、火葬墓を築造する理由について説明する必要性を感じさせる。堤川黄石里支石墓や広州駅洞石棺墓で確認された伸展葬、達城坪村里遺跡 3 号石棺墓で確認された屈葬等、多様な葬法の中に火葬が結合される様相を見せる。

おわりに

本稿で確認できた主な内容を整理すると、以下のとおりである。

火葬は青銅器時代早期から前期そして後期にかけて青銅器時代全時期にわたって確認され、初期鉄器時代にかけて行われた。その分布をみると、朝鮮半島南部地域で広く見られる。揀骨火葬、原地火葬等の様相は事例別に多様に確認されており、火を使用する様相も多様である。したがって、火葬墓の類型も多様に展開する。しかし、1 つの支石墓群を構成する支石墓の全てで火葬が見られるのではなく、一部でのみ発見される様相を見せる。洞窟火葬墓が旌善梅屯洞窟で確認されたことは、青銅器時代の農耕定着杜会における記念物である支石墓が築造される以前の地上記念物が築造されなかった時期の様相を示しており、集団領域の排他的占有のために支石墓が築造されると共に火葬が支石墓文化と結合してあらわれた姿を物語っている。火葬の概念が変化したり、火葬とは別途の推定淨化儀礼や推定辟邪儀礼の一つとして火を使用する事例も発見される。したがって、発掘報告書で火葬墓に分類された遺構のうち一部は火葬ではなく、葬礼儀礼の結果として生じた痕跡である可能性も提起されることから、木炭や火を受けた痕跡の存在から単純に火葬墓に分類することには慎重にならざるを得ないことも指摘したい。

青銅器時代の火葬墓や火葬葬法は遼東半島と朝鮮半島に広域的に分布し、青銅器時代早期から後期（松菊里段階）だけでなく、初期鉄器時代にかけて長期・持続的に確認されていることから今後、広域的・通時代的・実験考古学的・民族誌的視点から比較研究する必要がある。本稿では、性急な結論を下すよりは青銅器時代の火葬墓と関連した遺構の広域的分布の中に多様な類型が存在することを述べて、火葬墓に多くの研究課題があることを指摘することで結論としたい。

付　記

＊本稿で使用した全ての図面と写真は該当発掘報告書や略報告書またはマスコミ公開資料から使用したものであるが、引用は便宜上省

略したものもある。該当発掘機関の尽力と協力に感謝申し上げます。

＊武末純一先生の考古学研究に向かう学問的熱情と献身を尊敬しています。日韓考古学界の相互交流活性化と共同研究増進のために武末純一先生が寄与されたところは非常に大きいと思います。今後もさらに多くの学問的活動と業績を積み重ねられるとともに常にご健康でいらっしゃることをお祈り申し上げます。(2019 年 10 月 30 日受理)

註

（1）青銅器時代とは別個の問題であろうが、本溪地域の馬城子洞窟墓で新石器時代の火葬墓も発見されている。この点を考慮すると、春川校洞洞窟遺跡もそれが火災住居址であるのかあるいは洞窟墓なのかを確認するために、洞窟に対する全面再発掘を実施する必要性がある。

金権九（Kim Gwong-gu；大韓民国　啓明大学校史学科教授）

引用文献（カナダラ順）

金権九　2017「第２章　儀礼と社会」『青銅器時代の考古学４－墳墓と儀礼－ 』李栄文・尹昊弼編、書景文化社　179-196

朴晋昱　1988『朝鮮考古学全書 (古代編) 』科学百科事典総合出版社

卜箕大　2005「馬城子文化に関するいくつかの問題」『先史と古代』第 22 号、5-26

申石鶏　2015『人骨からみた青銅器時代葬制研究』東亜大学校大学院碩士論文

呉大洋・白種伍　2015「馬城子文化洞窟墓の型式と展開様相」『東アジア古代学』第 40 号、87-128

李鍾洙　2008「西団山文化石棺墓の特徴と起源について」『先史と古代』第 28 号、219-254

李隆助・禹鍾允　1988「黄石里コインドル文化の埋葬方法に関する一考察」『博物館紀要』第 4 号　5-28

崔ホヒョン　2014「中国東北地域前期青銅器文化再照明－張家堡 A 洞窟墓を中心に－」『古朝鮮檀君学』第 31 号　373-410

河文植　1997「美松里類型土器出土洞窟墓の研究」『白山学報』第 48 号　33-49。

河文植　1998a「支石墓の葬制に関する研究 (1) －火葬を中心に－」『白山学報』第 51 号　5-33

河文植　1998b「中国吉林地域支石墓研究」『韓国上古史学報』第 27 号　27-65

河文植 2005「古朝鮮の墳墓研究－中国東北地域支石墓と洞窟墓を中心に－」『北方史論叢』第 6 号　157-191

河文植　2009「古朝鮮時期の葬制と副葬品研究－馬城子文化の例を中心に－」『白山学報』第 83 号　67-90

河文植　2014「中国遼北地域支石墓の性格」『先史と古代』第 40 号　5-41

発掘報告書

慶尚北道文化財研究院　2015『慶州典村里遺跡』

鶏林文化財研究院　2012「慶州錫杖洞 876-5 番地遺跡－集合住宅新築敷地－」『慶州地域小規模発掘調査報告書Ⅱ』151-221

国立大邱博物館　2000『大邱上洞支石墓発掘調査報告書』

国立博物館　1967「五．黄石里遺跡」『韓国支石墓研究』国立博物館古蹟調査報告第 6 冊　99-125

国立中央博物館　1983『中島』国立博物館古蹟調査報告第 15 冊

畿甸文化財研究院　2006『平澤土津里遺跡』
畿甸文化財研究院　2009『安城萬井里シンギ遺跡』
文物出版社　1994『馬城子－太子河上游洞穴遺存』
社会科学院出版社　1966『中国東北地方の遺跡発掘報告 1963-1965』
三韓文化財研究院　2020『高速国道第 1 号線彦陽－永川拡張工事 (第 5・6 工区) 区間内永川半亭里プフン・永川庫旨里パラム･慶州道渓里支石墓群Ⅱ他 16 カ所遺跡 (1 巻)』
嶺南文化財研究院　2008『慶州德泉里遺跡Ⅰ－青銅器時代－』
延世大学校博物館　2019『旌善梅屯洞窟遺跡 (1) － 2016 ～ 2017 年発掘－』
全南文化財研究院　2006『羅州郎洞遺跡』
忠北大学校博物館　1996『平羅里先史遺跡』
韓国文化財保護財団　2012『大邱新西洞遺跡Ⅱ－大邱新西革新都市開発事業敷地 B 区域文化遺跡 (1 次) －』
ハノル文化遺産研究院　2012『広州駅洞遺跡』

（原文：金権九　2020「南韓地域青銅器時代 火葬墓に対する 考察」『福岡大学考古学論集 3- 武末純一先生退職記念 -』武末純一先生退職記念事業会 2020 年 3 月 28 日 P.193-207）

謝辞：本翻訳にあたり翻訳の許可を快諾していただいた金権九先生、福岡大学考古学論集からの翻訳に際し格別のご配慮をしていただいた小池史哲氏、古澤義久氏、関連文献の入手にご尽力いただいた趙晟元氏、姜眞周氏に文末ながら感謝いたします。